

論 文

日本語教育中上級段階における導入の構成プロトタイプ

— 実習授業の分析結果から —

丸 山 敬 介

表象文化学部・日本語日本文学科

1. はじめに

佐々木 (2002)¹ は日本語教育中上級段階の最大の関心事の一つである「文化」の解釈の変遷を通史として論じているが、それによれば授業で重視される文化とは、所産・知識としての文化だったものが'80年代以降に他者との相互作用に介在する文化という概念が生まれ、さらに'90年代後半からは個としての文化という考え方がなされるようになったという。そうした流れを受けてこの段階の授業のあり方も多様化し、言語・教養の学習の場といった従来型が継続される一方で、情報獲得と相互交渉を通してのより高度な課題認識作業と自己表現の場とする授業も幅広く認知されるようになった。このような変化をなした大きな要因の一つは、'80年代後半に始まった中国帰国者とその家族並びに'90年代初期に始まったブラジル人を中心とする定住外国人の急増である。言語の構造的知識の段階的獲得が日常のコミュニケーションの成立を必ずしも約束せず、それよりもその場で求められる立場と話題を適切な言語形式に乗せて表現することのほうが重要視され、それがやがて彼らの個としての存在の認めとなり、さらに教える者と教わる者の対等性の保証・互いの学びの重要性がうたわれるようになった。国内の日本語教育の一翼を担うようになるまでの成長をみせるボランティア活動の充実さらに認知構成主義から社会的構成主義へと転換しようとする外国語教育が、そうした変化を後押しした。

佐々木が指摘するように、こうした新しい流れは従来の授業のあり方を一掃したわけではなく、学習者の特性に合わせて住み分けをしているあるいはさまざまな折衷型を形成して共存している。けれども、学習型授業では知識を詳細に明らかにすることが指導そのものの適否・評価を大きく左右したのに対して、課題認識型授業のあり方は理念や

それに基づいた大まかな方法論としては語られるが、具体的な教室活動として例えばエスノメソドロジ的な手法をもって論じられることはない。したがって、最もそうした授業のあり方を迫られている地域のボランティア教師にあっては範とすべきモデルなしで文字通り手探りの状況で日々の指導を工夫せねばならず、その道程を振り返ってみて結果的に課題認識型授業に到達していたというのが実情である。

そこで、ボランティア教師の予備軍をなす教師養成講座の受講生の実習授業を分析し中上級段階の授業における導入がどのように行われているかを記述し、その分析をもって学習型授業と課題認識型授業を理解する基礎資料を提供しようというのが本論の目的である。論の基本姿勢として学習型授業ではなく課題認識型授業に軸足を置いている点では今日的授業の側に立つが、ことさら相互交渉や自己表現の点に注目してそれを追求しようというものではない。

2. 導入のプロトタイプとその特徴

今日の日本語教育中上級の主要な教科書の教師用解説の部分分析²してみると、この段階の授業は、導入→読解を中心とする題材の理解→理解をもとにした発展的な活動、の三つのプロセス³に分けるのが一般的である。この三分自体は従来から今日に至るまで指導現場で共通理解となっているものであるが、このうち、導入部分は細かな指導技術を求められないため他の二つの部分に比べてより一層理念や指導の姿勢に終始し、先に述べたような形で具体的に語られることがない。

筆者は、関西地方の複数の大学・大学院及び複数の民間の日本語教育機関において主体的に実習授業に携わる機会を得、そのほとんどで参加観察すると同時にVTR収録しているが、2003年から2008年までの5年間の約70の中上級段階の実習⁴を分析すると、導入から題材理解のプロセスへと移行する談話構成はおおむね次の三つのタイプに分類される。すなわち、日常的な話題から教材の主要テーマに

Three Types of Introductions in the JSL Practicum for Advanced and Intermediate Levels

段階を追って移行していく「飛行機型」、日常的な話題で授業を開始したものの途中で飛躍して教材のテーマや教材そのものにあたる「ヘリコプター型」、ほとんどあいさつ程度のやり取りをただですぐに教材のテーマや教材そのものにあたる「ロケット型」の3種である。これらのうち最も多かったのはヘリコプター型で参加観察した実習の約7割を占め、次いで飛行機型が約1割、ロケット型が約1割、その他⁵約1割という順であった。

岡崎・岡崎(2001)⁶は本論でいう課題認識型に立ち、導入部分のねらいは、先行タスクとして読む目的を明確化するとともに、既存スキーマを活性化し新スキーマを形成することとしている。そうした観点からみれば飛行機型が最も望ましいといえるが、これらを分けるものは主にテーマの問題構造の把握能力とその提示能力と思われ、構造を十分把握しそれをいかに学習者のスキーマ活性・形成に即した形で提示していったか・いかなかったかで、三つのうちのどのタイプの傾向を帯びるかが決まると考えられる。いずれにしろ、こうした三つのタイプの存在とその特性を知ることが課題認識型授業の基本的あり方を考察する上で不可欠なものと思われる。以下に、各タイプの概略を示す。

2-1. 飛行機型

実習生や学習者の日常から材料を探り出し、それについていわば世間話的に話をしているうちに、いつの間にかその場のやり取りを題材の主要テーマに導いていく導入のタイプである。収録VTRを分析すると、おおむね、次の①～③の特徴を備えていることが明らかである。

① 主要テーマが端的に表れている話題の選択

テーマの一端があるいはテーマに通ずることがらが端的に表れていてしかも学習者の関心を得る話題が選択されている。学習者の背景が多様であれば、そうした話題を複数用意する。そうやって、教材のテーマが決して学習者の日常から切り離された高尚な教養主義的なものではなく、日々の生活の中であって自分の身近にあるもの・自分に関係す

るものとして意識させようとする。

② 談話の導き

a. 巧みに談話を組み立てていく、b. 談話の折々で学習者からの引き出しを行う、c. 必要なときに談話をリードする、の三つの能力が発揮され、これらを駆使して日常的な話題から教材のテーマへと円滑に談話を移行させる。

a. は授業冒頭で①の話題を提供したときがその最初といえるが、テーマの持つ問題構造が少しずつ明らかになっていくように、機をみてその背景や経緯・因果関係などに話題を導いていくものである。先の話が布石となり後の話を方向づけたり前の話の接ぎ穂をうまくつないで次の話題を展開させたりして談話を導き、問題構造の輪郭が把握されテーマが明確になった時点で教材にあたるという形を取ることが多い。

b. は、a. の実習生の主導性とは逆に、学習者の積極的な参加を促して①と同様、その日常性・当事者性を確保・維持しようというものである。母国の事情を紹介させる、自分の見聞の中から何らかのエピソード的なものがないか考えさせる、その場で話題になったことがらに関して簡単な意見や感想を求めるなどといった作業を通して学習者に働きかける。こうした働きかけに長けた実習生はそれに対する自らの受け答えも巧みで、同意したり反発したりまた驚いたりしてみせる。それが、観察者にはあたかも学習者と同じ目線に立ってやり取りしているように映る。したがって、導入全体を通して学習者・実習生双方の個人的生活の一部・価値観・個性のようなものが表れやすく、また a. の実習生のリードがみえにくい。

c. は、話題をそれにふさわしい学習者に振る、学習者の発言を補いまとめるなどして他の学習者に伝える、話がずれたときに軌道修正を試みる、沈黙が発生したときに例をあげたり質問の角度を変えたりして発話を促すなどといった、いわば談話の時々の機転の利かせ方である。実習生の「教師的」リード能力といってよい。

③ テーマを論じるのに用いられる語句・表現の取り上げ

主に②の a. の談話を組み立てていく作業を通し、ごくごく自然な流れのうちに教材の中の重要な語句・表現を提出する。時には、教材には含まれなくとも主要テーマを論じるのに必要な語句・表現を提供することもある。学習者は、こうして得た語句・表現を通して、結果的に教材を理解しテーマを論ずる術としての基本的知識及び概念を事前に獲得することとなる。

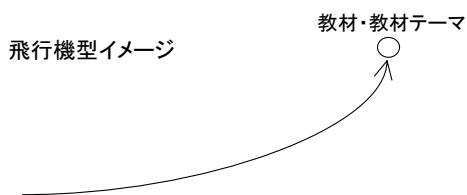


図1

2-2. ヘリコプター型

学習者の日常から材料を探し出し段階を追って主要テーマに移行していこうとするのだが、ある時点でそれが中断し教材のテーマや教材そのものにあたってしまふ導入のタイプで、最も頻繁にみられた。



図 2

けれども、前記①話題の選択・③語句・表現の取り上げにおいて、飛行機型と遜色ないといってよい。問題なのは②の a. 談話の組み立て作業で、テーマの問題構造に関して十分情報が提供されずそれゆえ検討も不十分なうちに談話の組み立てが中断される。すなわち、テーマの背景・経緯・因果関係などの一部を欠いたままで、テーマ紹介・題材理解へと移行してしまう。その分、学習者の知識・情報は少なくスキーマ形成も不十分といわざるを得ず、時には誤解さえ生じている可能性があるものと考えられる。

2-3. ロケット型

ほとんど事前の知識・情報を与えることなしにいきなりテーマに言及し、学習者の意見を聞く・実習生の見解を述べる、あるいは教材の読解作業に移行してしまう導入のタ

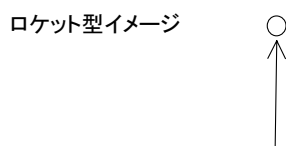


図 3

イプで、数そのものは多くないが社会経験が少ない実習生、ことに学部学生に特徴的にみられた。

こうした実習生は、インターネットなどの使用に慣れ高い資料収集能力を持つ場合が多く、むしろ他の実習生よりの確あるいは多彩な資料を用意する傾向がみられる反面、前記②談話の導き、中でも a. 談話の組み立てが不十分であった。授業開始のあいさつを交わし教材内容に関連する話題に軽く触れただけで「じゃ、それについて読んでみましょう」などといって教材の読解作業に入る、用意した資料は配布するものの導入で交わされる話の内容が貧弱でそれらが十分生かされない・時にはまったく取り上げられない、題材を理解する作業に入ってもそこに書かれた内容の表面的な把握作業にとどまり、それをもとに発展的な話し合いの機会を設けるなどの働きかけがほとんど行われないうちに授業が終了する、といったケースがしばしば観察された。

主要テーマの問題構造を把握しそれを卑近な話題から本質的な問題の検討に昇華させていくにはある程度の成熟した視点が求められそのためにはしかるべき社会的経験が要るものようで、そうした点において年齢の低い実習生にはもともと課題認識型指導の遂行が困難で、それがロケット型導入の頻出につながったものと思われる。

3. 各タイプのサンプル

次に、三つのタイプごとにその分析例を示す⁷。

3-1. ロケット型導入

教材は寄稿文である。「主夫」が急増しているという報道を受け、それを寄稿者の祖母と話し合うという形を取り、その背景・新しい夫婦のあり方に考えをめぐらすというものである。実習は中国出身の女性に対して個人指導の形で行われたものであるが、記事の内容にほとんど踏み込まず本文読解の作業に移行しており、ロケット型導入を形成している。

資料1. ロケット型 (教材:『主夫』になる自分を想像) 2004/11/18 沖縄タイムズ)

No. T/S

0 : 00

1	T	おはようございます。Tです。お願いします。 Sさんは、結婚していますか？
2	S	はい。しています。
3	T	結婚しています。子どもは、いますか。
4	S	はい、います。
5	T	何人いますか？
6	S	一人だけ。
7	T	ああ。Sさんは学校の先生をしていますね。 家では、お料理とか洗濯とかは、Sさんがしますか？
8	S	します。
9	T	だんなさんは？
10	S	ううん、時々はします。
11	T	じゃ、子育て、子どもを育てるのも、ほとんど、Sさんがしましたか？
12	S	ううん、家事は、私、しますね。
13	T	Sさんがしますか。 そういう家事とか育児をする女性が、女の人がするというのを、「主婦」といいます。Sさんは、主婦です。
14	S	主婦？
15	T	(漢字を書いたパネルを見せる)「主婦」です。
16	S	うん、わかります。主婦？
17	T	主婦ではないですか？
18	S	うん、ああ、そう、思ってます。でも、仕事も……。
19	T	仕事もして、家事もして……。そう。 ではこっちの記事の、左の記事なんですけど、一番最初に、二文字書いてあります。読んでもらえますか？ あっ、ここ、真ん中のほうです。この最初の二文字、読んでもらえますか？
20	S	はい。『主夫』。別に漢字を……」
21	T	あっ、その二文字だけでいいです。わかりましたか？
22	S	見出しですか。
23	T	これ、「しゅふ」って、読めましたか？
24	S	「シュフ」。
25	T	どういう意味か、わかりますか？ 思いましたか？
26	S	主夫。たぶん、昔の主婦、婦人の方と違って、主夫、……。
27	T	はい、主夫。読み方は、「シュフ」です。
28	S	はい、あとう、「主夫」の意味、たぶん、今は家事とかそんなこと、家事とか、ほとんど、夫、だんなさんがすることを指します。
29	T	あっ、はい。はい、そうですね。 じゃ、ええっと、この「主夫」ということばなんですけども、ええっと、これをどんなものかというのが下に書いてありますんで、読んでください。
30	S	はい。『主夫』。別に漢字を間違えたのではない。……」(以下、本文第1段落、S読み)

3 : 20

No. 19で教材の中の「主夫」を読ませ No. 25でその意味を問うているが、導入の途中で直接教材の一部を読ませ

たりすること自体は珍しいことではなく長い経験を持つ教師でもそうした導入を図ることがある。けれども、それを

受け No. 29で「これをどんなものかというのが下に書いてありますんで」と No. 28の S の発話を深く検討することなどなしに読解に移行している。

No. 12にあるように、学習者は家事全般を担っている。それを受けた「(あなたは)主婦です」という No. 13の実習生の発話に対し、No. 16では「主婦？」と戸惑い、No. 18の「でも、仕事も……」と言い淀んでいる。この二つの発話からは学習者が高い職業意識を持っていることが想像されるが、であればそこからはさらに、学習者にはそのような意識がありながらも現実としては伝統的な夫婦の役割のあり方のほうがまさっているという価値観、あるいは逆にそうした価値観に立脚しながらもある種の不平等感があることといった学習者の心情があるのではないかとの推測が立つ。そうしたものの一端を垣間みせたという意味において、No. 13の実習生の「Sさんは、主婦です。」という強引な決め付けは結果的に重要な働きをなしている。ところが、実習生は「主婦」との対比において「主夫」を導入する意図で流れをそこに持っていくべく、No. 16・18に対しては「仕事もして、家事もして……。そう。」(No. 19)

という軽い受け答えしかしていない。その「主夫」の導入にしても No. 28で学習者にそれが何を指すか辞書的な意味を言わせてだけで、No. 30の本文読みに移行し打ち切っている。この No. 28は、それこそ学習者の置かれた現実を吐露した No. 12との対比において、再び学習者の価値観と心情を導きだすきっかけとなる発話であった。さらにその導きからは、「主夫」という人たちのあり方、「主夫」が出現してきた夫側・妻側の事情、社会背景などに教材のテーマ理解につながる情報に言及できたはずである。

ちなみに、次はこの実習の記事読解後の発展的な活動である。No. 187で、夫に定職がなければその夫が家事をするのは当然と学習者が答えているが、これは学習者の知っている母国事情を生の情報として述べているのみである。記事では、主夫が出現してきた背景として、夫の出世競争からの脱却・育児への積極的な関わり、夫婦協力の新しい形などが指摘されているが、それらを踏まえて自らの価値観を再構築したものではない。すなわち、教材理解の作業を経ても、学習者の中に意識の広がり・深まりが芽生えていない。

資料2. ロケット型 発展的な活動

59 : 45

172	T	この主夫は、日本でも、最近、知られるようになって来ました。Sさんは、この、主夫という人たちがいることを、知っていましたか？
173	S	ううん、初めて。
174	T	初めて。では、中国では。
175	S	あります。
176	T	いますか？ そういう人たちに、何か中国語で名前がついていたりしますか？
177	S	ううん、名前がついてる？
178	T	名前っていうか、この主夫ということばは、日本でも、最近、出てきました。この「夫」と書いて「シュフ」というのは。最近のことば。
179	S	ううん、ことばがまだ出ていません。
180	T	まだないですか。
181	S	その家庭は、もう、あります。
182	T	ありますか。中国では、たくさん、ありますか？
183	S	少ないです。
184	T	少ないですか。え、中国で、ええっと、妻が仕事をして夫が家事をするという家があっても、だれも変だとは思わないですか？
185	S	思わない。思いません。
186	T	思わない。
187	S	それは夫が定職がないから。定職。
188	T	はい。

189	S	仕事がありませんから。
190	T	じゃ、妻が働きに出るということは、普通ですか？
191	S	普通じゃない。
192	T	普通じゃないということですか？
193	S	でも、変だと思いません。
194	T	思わない。 (指導教師に目配せして、終了)

1 : 01 : 32

3-2. ヘリコプター型導入1

教材は社説で、増え続けているフリーターの実態、その生まれる背景などを述べた上で、国をあげて対応を考えて

いかないと日本の活性化を阻害するとしている。次の導入では、少年少女時代に抱いていた夢を語っていたのが、いきなりフリーターの話に飛んでいる。

資料3. ヘリコプター型 (教材:「フリーター問題」2000/11/05 産経新聞)

15	T	みなさん、忙しいですね。私は、ええと、たまっていた部屋の大掃除をしました。机の上を掃除しているときに、昔の日記などが見つかったんですよ。で、やっぱり掃除を中断して、ずうと読んでしまったりして。で、そこには、友だちのこととかそのとき思っていたことがいろいろ書いてあったんですけど、ちょっとした恋のこととかも書いてあって、で。(S一同、笑う) みなさん、笑わないで下さい。 それで、一番、書いてあったことは、将来の自分についてなんです。で、私はそのとき、パン屋さんになりたいくて、で、パン屋さんになりたい気持ちとかをすごい書いたんですよ。 みなさん、日記、書いたりしますか？ S4さん、書いたことありますか？
16	S4	はい、あります。
17	T	どんなこと、書いてたんですか？
18	S4	友だちのこと、……。私も、将来のこととか多かったと思います。
19	T	S5さん、日記は書いたこと、ありますか？ どのようなこと、書いてましたか？
20	S5	ええと、友だちのこととか。
21	T	やっぱり、友だちのこととか、多いですね。私は、さっき言ったように、将来のことを書いてて、ま、そのときはそれなりに一生懸命だったんですけど、ま、今ここで、先生として立っているわけなんですけど、皆さんは、小さいころや学生時代、どんな職業に就きたかったですか？ S6さん、どんな職業に就きたかったと思われませんか？
22	S6	獣医さんになりたかったです。
23	T	は？ 獣医さんに。どうしてですか？
24	S6	動物、好きだったから。
25	T	ああ、いいですね。S1さん、将来の夢とかありましたか？
26	S1	サッカー選手です。
27	T	サッカー選手ですか。かっこいいですね。今も、サッカーとかやっているんですか？
28	S1	いえ。
29	T	あれ、やめちゃったんですか。S2さん、将来、何になりたかったとかありますか？
30	S2	ケーキ屋さんになりたかった。
31	T	ケーキ屋さんですか。ケーキ、好きなんですか。おいしいですね。
32	S2	(笑い)

33	T	みなさん、いろんなことを思い描いていたと思うんですが、今日は、そんなことを思いながら、この文章を読んでみましょう。
34	T	今日はフリーター問題についてをやるんですけども、この「フリーター」というのは、「フリーター」は聞いたことありますか、S3さん。
35	S3	ないです。
36	T	どういう意味だかわかり……、どういう意味だか知っていますか。
37	S3	知りません。
38	T	知りませんか。では、S4さん。「フリーター」は聞いたことがありますか。どういう意味だか知っていますか。
39	S4	わかりません。
40	T	わかりませんか。じゃ、説明します。「フリーター」というのは、「フリーアルバイト」というものの略で、これはちゃんとした仕事に就かないで、アルバイトだけで生活を立てている人なんですね。
41	T	では、本文に入ります。私が一度全文を読みますので、聞いていてください。今日は、1段落から6段落までやります。

週末をどう過ごしたかと問い、ほとんどの学習者がアルバイトをしていたと答えた続きがNo. 15である。実習生自身は週末には掃除をしていて古い日記を見つけ、ついつい読み進んでいくうちに当時抱いていたパン屋になる夢に行きあたったと披露しているが、そこから、学習者に子ども時代の夢を問い、獣医・サッカー選手・ケーキ屋の三つを引き出している。週末の過ごし方から将来の夢へと導いていく設定はむしろ巧みで、日記を持ち出したのは演说的でさえある。将来の夢自体も人柄に触れる多分に情緒的なもので、学習者もつい引き込まれたであろう。ところが、それはNo. 33で突然断ち切れ、その後はフリーターの意味の確認に移行してしまう。断ち切り方も粗略で、「この文章を読んでみましょう」などと学習者を導いても、そもそも教材は事実を述べてフリーター問題への早急な対応を呼びかける硬質な社説で、子ども時代の夢云々といった内容も情趣も持ち合わせていない。すなわち、ここに、強引に教材内容に導こうとする飛躍が認められる。

しかしながら、実習生の意図を忖度するに、日記に描いたパン屋を持ち出したのは、若いころに描く将来の夢と現実とのギャップ、それとフリーターを結びつけようとしたからではないかと思われる。すなわち、夢があったけれどもかなわずフリーターをしている若者たち・フリーターをしながらもなおも将来の夢を追う若者たち、夢は夢として割り切り一職業人となって生きる若者たち、さらに夢とは無縁に安易な社会的立ち位置としてフリーターにとどまっている若者たちなどに言及し、フリーターをより身近な現実的な存在として学習者の前に提示しようとしたのではないか。いかにも舌足らずな「そのときはそれなりに一生懸

命だったんですけど、ま、今ここで、先生として立っているわけなんですけど」(No. 21)・「いろんなことを思い描いていたと思うんですが、そんなことを思いながら」(No. 33)というのは、こうした本来の意図からすれば、若者特有の高揚感や感傷、現実社会との交わりで得た挫折感と人としての成長などに思いを馳せたものと思われる。こうした切り口はそれでもなおこの教材の社会性・論理性・訴求的態度とはそぐわない側面を多分に持っているが、掃除の手を止めて日記に読みふけりそこに幼いながらも真摯な夢を見つけた実習生の日常と感性とに見合う、いわばこの実習生ならではの視線に立ったものといえよう。さらに、日本で日本語を学ぶ外国人とはとりもなおさず何らかの夢なり目標なりを追っている若者たちであることを考えれば、こうしたアプローチはこの教材に対しても十分に成立しうると考えられる。

問題はそこからいかにして教材内容の一端に結びつけるかで、学習者の思い描いていた夢を聞いた後で、その夢はどうなったか、あきらめた・変わったとすればそれはなぜか、今はどんな将来設計をしているか・その目標に向かってどのような道筋を立てようとしているかなどを話し合っで職業観・就労意識・人生におけるキャリア形成などを浮き彫りにし、次いでNo. 34~40にあるフリーターの導入、さらにそうした若者が生まれる要因・社会的存在としてのフリーター・彼ら自身の人生設計などに触れる展開をしていくべきであったと思われる。

3-3. ヘリコプター型導入2

教材は囲み記事で、現在、日本の自動車産業は好調であ

るが、韓国車の追い上げ・中国市場の開拓・アメリカの巻 習者が興味を持ちそうな話題から入っているが、途中で
 き返し・代替エネルギーの開発の四つの課題を抱えている、 教材内容に飛躍する。
 という内容である。次の導入では、車社会の今昔を比べ学

資料4. ヘリコプター型 (教材:「自動車産業の将来」2005/7/1 毎日新聞)

0:00

1	T	はい、それでは始めます。私は、(黒板に名前を書いて) ええ、「T」といいます。ええ、(生年、板書) ○○年の生まれで、○歳です。よろしくお願ひします。(S4から順に指して) ええ、S4さんです。それから、S3さん、S2さん、S1さん。 ええ、S3さんは、中国の、どこのご出身?
2	S3	中国の○○(地名1)。
3	T	あ、○○。
4	S3	ご存知ですか。
5	T	いや、場所は。○○は、実は、行ったことがないんです。中国は意外と行ってますけれども。
6	S3	ぜひ、来てください。
7	T	S2さんは、中国のどこですか。
8	S2	○○(地名2)。
9	T	あ、○○ですか。あ、う、そうですね。S3さん、何年前に日本に来たんですか。
10	S3	あ、う、ま、もうすぐ2年になりますね。
11	T	2年。ええ、初めに日本に来た時の印象、感じたことはどんなことですか。
12	S3	日本に来たばかりの時は、日本語、すごく下手ですね。
13	T	ううん、そうですね。何を感ひしましたか。人が多いなあとか。家が小さいなあとか。
14	S3	ま、あの、ちょっと低い感ひ。
15	T	人がですか、家がですか。
16	S3	家。
17	T	ああ、家が。
18	S3	私のふるさと、ビル、(手でビルの高さを示して) ちょっと高いですね。
19	T	ああ、そうですね。
20	S3	この感ひですね。
21	T	なるほどね。S2さんは、何年ですか。
22	S2	もうすぐ4年目になります。
23	T	4年目。どんな、初めての印象は何ですか、日本の。
24	S2	うう……。
25	T	と、聞かれても難しいですよ。
26	S2	初めての印象は、あの、いつもいつも日本の、あの、仕事の忙しさ。
27	T	みんな、忙しそうにしてた? そうですね。 あの、S1さんね。日本へ来てね、車が多いなと思ひませんでした? そういう感ひじゃなかったですか。
28	S1	うん。
29	T	そうですね。向こうも、○○(S1の出身国の地名1)も車、多いですか。
30	S1	○○はそうでもないですけど、○○(同、地名2)は多いです。
31	T	え?
32	S1	○○は。

33	T	ああ、〇〇は多いですね。		
34	S1	「コンザツ」、「コンザツ」？		
35	T	あ、「混雑」。		
36	S1	混雑も多いです。		
37	T	後で出てきますけど、S4さん、〇〇（S4の出身国の地名）ですからね、そんなに変わったことはないかもわかりませんが。S4さん、何年でした？		
38	S4	ま、もうそろそろ2年。		
39	T	A	①	2年くらいね。後で出てきますけど、日本は、ま、狭い国に人がたくさんありますけど、特に車が多いんですよ。小さい国の割にはですね。ええ、ただね、今日、車の話をしたいんですけども、ずっとというか、日本がこんなに車がたくさんあるようになったのはね、最近のことなんです。 最近といっても私の見る限りの最近ですから、ま、少なくとも50年ほど前までは、ほんとに車が走ってない町だったんですね。
			②	（写真を取り出しながら）ええ、ちょっと、この写真を……。 （写真を黒板に貼って）これが、〇〇（学校の所在地）の町です。 （写真を指して）ええと、これが、1956年です。私のことばかりいって何ですが、私が、〇歳の時ですね。 （地図を貼りながら）ええ、ちょっと、〇〇を知らない人もいんでしょうから、地図も用意しましたが……。 （写真の電車指して）これ、あのう、「市電」といったんですね、「シ」というのは〇〇市の「市」ですね。ですから、路面電車ですよ。地上を走ってる電車。 （地図を指して）ここ、〇〇（観光名所1）ですね。ですから、学校はここですね。 （写真の通りを指して）この通りは地図でいうとこの辺りですよ。この辺りを走っている電車だったんです。見ての通り、電車が、あのう、王様のように走っている。車1台しかありません。
			③	（別の写真を指して）それからこれは、〇〇（通り名）ですから、 （地図を指して）一番にぎやかな通り、この辺りですよ。今ですと、車がほんとに混雑して、そこを、市電が走っていたんです。 （再び、写真を指して） これを行くと〇〇（観光名所2）がありますが、車がここに2台ほど見えます。こちらにも2台見えますけれども、あとは自転車です。 日本も、約50年ほど前はこんな感じだったんですね。それが、あっという間に車が増えてしまって、 （2枚の写真を学習者に渡して回覧させる）今は道路という道路は、ええ、車で埋まっているとようなことになってきたわけです。
			④	50年ほど前、 （地図を指して）私、この辺りに住んでいたんです。〇〇駅の近くに住んでいたんです。大通り、そういう大きな通りでも市電が走っている状態ですから、少し大通りから離れるともちろん舗装はしてませんから土の道路で、石ころがあって、ちょっと広い通りというのは全部子どもの遊び場だったんですね。ですから、学校から帰ってくると家にカバンを放り投げておいて広い通りへ行くと子どもがいっぱいと。で、そこで野球をするサッカーをする、時には道路いっぱいには円を描いて相撲を取る、というような生活だったんですね。 で、その50年程の間に、日本はこれほど車が増えてきた。
39	T	B	⑤	で、話は変わりますが、世界中で車がどれくらいあるかという、これ、わかりますか。世界中で。あのう、それは見当もつかないと思いますけれども、世界の人口というのは60億人、 （「60億人」板書） といわれているわけですよ。これは、赤ん坊からもう動けないお年寄りまで含めて60億。これに対して、後で見させていただきますけれども、車の台数、 （「7億台」板書） 一応、登録されており走る態勢になっている車は7億台あるわけですよ。8人に一人、車がある。これは、どう考えても異常だと思うんですけどもね。あのう、それが今の世界の車の台数だそうです。
			⑥	で、そういうことで、今日は車の話をしたいと思うんですが、ちょっと、今の話で、ええ、 （教材・資料、配る） この紙の、2枚目をちょっと見てください。ちっさな表なんですわわかりにくいんですけども、その1番のところ、今、私がいったことが書いてあります。え、およそ7億台の自動車が走っているといわれている。 （配った資料の拡大版を黒板に貼りそのうちの国別所有台数の表を指し） この表の、あの、その表を見ただけだと思っていますけれども、それを国別に書いているものですね。ええ、アメリカ、一番上にアメリカとありますが、……

導入は、この後、読解開始までに、記事で用いられている車種の説明とどの新聞からこの記事を持ってきたかの説明をしているが、全体の流れは以下の通りである⁸。

(1)で指導を開始した後、(2)で学習者の来日時の印象を尋ね、そこから(3)の日本の道路の混雑ぶり・車の普及へと話

題を導いている。さらにそれを受け、(4)では、そうした日本の車社会はここ50年ほどで急激に形成されたことを述べている。そして、形成前の日本を印象付けるために、実習生の子ども時代の話を持ち出している。

図4

	導入の流れ	具体的活動内容	No.	時間
(1)	一般的な導入	自己紹介。学習者確認。出身地尋ねる。	1	
(2)	車への振り向けさせ布石	来日時の日本の印象を尋ねる。	11	
(3)	車への振り向けさせ	車が多いと感じなかったか、との質問。	27	
(4)	車普及の今昔対比 A	「狭い国に、車が多い。」	39	①
		「車が多くなったのはここ50年のこと。」		①
		1956年当時の写真、提示。地図を参照しながら、当時の車の少なさ、紹介。		②/③
		Tの子ども時代の回想。のどかな道路での遊びなど紹介。		④
(5)	車普及の今昔対比 B	8人に1台の割合で車が普及していること、紹介。		⑤
		記事と資料配布。資料1「国別所有台数」、説明。		⑥
(6)	記事の語句導入	車の分類(乗用車/商用車/高級車/小型車……)、説明。	/	13:15
(7)	記事入手の説明	記事の説明(何新聞のどの欄から)。		15:30
(8)	読解開始	本文読解開始。		16:20

こうした発想自体はきわめて妥当で、(2)から(3)への転換さらに(4)への展開には無理がなく、またある程度年齢を重ねた実習生の(4)の具体的な話は説得力を持ったものだったと考えられる。

ところが、(4)との比較、車社会形成後の話題として出したのが(5)で、実習生の子ども時代の話と比べれば情報としての説得力はあっても実感に乏しく、そこに行くまでもう一つ学習者側に立ったステップが必要である。そういう意味で飛躍があり、ヘリコプター型といえる。以下に、詳細を検討する。

車社会へ振り向けさせるまでの流れの分析

実習開始にあたり、実習生は、一人ずつ出身地と在日年数を聞いた上で、日本に来た時の印象を問うている(2)。授業開始にあたってのごく自然な社交辞令であるが、実習生としては日本の道路の混雑ぶりを導くための方向付けをしたものといえよう。学習者が述べた印象は順に、日本語が下手だった(No. 12)・建物が低かった(No. 14)・仕事で忙しそうだった(No. 26)で、道路の混雑自体は出なかつ

たものの、No. 26からの連想として No. 27で車が多いことに話題を転換している(3)。結果的に S1 からは同意が得られず(No. 28~36)、また続く S4 からはもともと期待した答えが得られないと判断したためかその印象を聞かずに(4)の車社会形成前の日本事情に移行しているが、ここまでの展開に強引さは希薄である。むしろ、来日時の印象 → 道路の混雑 → 以前の車社会 → 今日の車社会 → 日本の自動車産業 → 本文という発想自体はよく練られているといえる。

車社会の今昔比較における飛躍の分析

続く No. 39は次の二つの部分で構成されているが、Aは車社会を形成する前、約50年前の町の様子、Bは車社会が形成された現在の状況である。

A : ①日本の急激な車の増加 → ②③1956年当時の車の少なさ紹介 → ④Tの子ども時代の回想

B : ⑤8人に1台の普及率 → ⑥資料1説明

現在の状況に関しては、実は、No. 39の④末尾に「その50年程の間に、日本はこれほど車が増えてきた」という発

話がある。けれども、これはその内容・長さともにきわめて軽いしめくくりのことば的役割しか果たしておらず A との比較には至っていない。③の末尾の発言も同様である。したがって、話題が転換する B の冒頭としては⑤が担っていると考えられるが、その④と⑤の間に飛躍がみられる。

②③では50年前の写真を2枚用意し、位置関係を確認した上で、市電が王様のように走っていたこと、自転車中心で車は数台しか走っていなかったことを紹介している。見知らぬどこかの風景ではなく、日本で初めて慣れ親しんだであろう町の50年前の様子を示されて、学習者たちは大いに興味を抱いたものと思われる。事実、ビデオには、めいめいの学習者が③で回覧された写真に見入っている様子が収録されている。さらに、④で実習生の子も時代を回想して、大通りを外れると道路は舗装されていなかったこと、そうした道路は子どもの遊び場同然だったこと、放課後にはそこでサッカーや野球をしたことを述べている。この実習生は実習生の中では年配者に属したが、実習を開始するにあたり、自己紹介として生まれた年を西暦で板書し口頭で年齢をいっている (No. 1)。こうした自己紹介は実習生の間ではまれで年齢的遠慮がそうさせたものと思われるが、むしろその年齢が②③④の語りにも重みを与えている。すなわち、車社会を形成する前の様子は、学習者たちが暮らす町の50年前の写真と実習生の実体験をもとに明らかにされている。

そうした具体性・親近感に比べると、⑤の「60億人／7億台／8人に1台」というのはあまりにも客観的すぎかつ学習者の日常から乖離している。②③④と対称をなしていない。「8人に1台」というのは確かに50年前と比較した今日の成熟した車社会のあり方ではあるが、「世界中で」といわれるとその事実は茫洋としていて実習生のいう「異常な」実感としてはとらえにくい。

⑥をみるとこの数字が配布資料にあることがわかるが、その後の(6)をみても、実習生は⑤の「で、話は変わりますけれども」で大きく教材解説に舵を切ったものと思われる。その結果、それまでの導入と内容的脈絡は保たれているも

の語りとしては断絶し、個人的な回想的紹介から数字とグラフを使った講義的な説明へと調子に変化した。その調子の変化が、ヘリコプター型飛躍を形成している。

②③④の持つ具体性・親近感と対称をなす形で現代の車社会を語るには、学習者の見聞をもとに彼らの目線に立った考察が必要である。学習者の見聞とは、彼らが暮らす日本の町で見知ったことあるいは母国で経験してきたことである。彼らの目線に立った考察とは、その見知ったこと・経験したことについての彼らの印象なり感想なり解釈なりである。彼らの暮らす日本の町でいえば、王様のように走っていた市電がなくなった理由、それが最近また復活してきた町があること、ゴールデン・ウィークなどで見聞きした道路や駐車場の混雑状況、また母国でいえば、路面電車をはじめとする公共交通の存在、道路の混雑状況、さらにこの実習当時、トヨタがアメリカの会社をしのいで自動車生産量世界一の座を確保したことが話題になっていたが、母国での日本車の普及事情・評判を聞くなどという展開も考えられたであろう。

こうした話題を実習生が提供し学習者と分かち合うことによってまた実習生から得ることによって、現代の成熟した車社会とその背景などが自分たちの問題として把握され、さらに教材に盛られた四つの課題の端緒をつかむことができたのではないか。そして、そうしたプロセスを経た上で(5)~(7)資料を使った補足的な解説さらに(8)本文読解へ移行すれば、ヘリコプター型飛躍が回避できたものと思われる。

3-4. 飛行機型導入 1

資料5. は『中級から学ぶ日本語』第6課の導入である。本文は、型や決まりを重んずる伝統文化にしか使わないはずの「道」ということばを今日ではパチンコにも使うらしいが、パチンコはもともと遊びであり不必要に精神性を追う必要などないのではないかという内容である。以下では、身近な話題を展開させ本文内容に導き、飛行機型導入を形作っている。

資料5. 飛行機型 (教材:『中級から学ぶ日本語』(研究社)第6課)

0 : 15

3	T	今年も、もう12月ですねえ。今年もいろいろなことばがはりましたね。どんなことばがはったか、何か知っていますか？ S1さん、どうですか？
4	S1	はい、ええ……、「残念」。
5	T	ああ、「残念」。そうですね、ギターを持って、面白いことをいう人がいましたよね。他に何か、知っていますか、S2さん。
6	S2	あ、さっき、言った、また、さっき言った、あの……。
7	T	同じですか。S3さん。何かありますか。
8	S3	「セカチュウ」。
9	T	「セカチュウ」。「世界の中心で愛を叫ぶ」というタイトルですよ。映画、見ましたか？
10	S	はい、見ました。
11	T	よかったですか？
12	S	はい。
13	T	そうですね。ええと、S4さん、他に何か知っていますか？
14	S4	わかりません。
15	T	わかりませんか。えと、「チョー、気持ちいい」ということば、聞いたことはありますか？
16	S	はい。
17	T	ありますか。「チョー、気持ちいい」は、今年、一番、はやったことばです。だれのことばか知っていますか？
18	S2	はい。
19	T	S2さん。
20	S2	ええと、北島康介さん。
21	T	そうですね。水泳の北島選手が、アテネオリンピックで言ったことばですよ。皆さん、アテネオリンピックは見ましたか？
22	S	うん。(全員、うなづく)
23	T	何かよかったスポーツはありますか。S4さん。
24	S4	ええ、柔道で、あの、ええ、谷亮子さんの、あの、姿が、今、印象に残っています。
25	T	そうですね。谷さん、すごかったですよね。
26	S4	はい。
27	T	S2さん。何か他によかったスポーツはありますか？
28	S2	ええ、私も柔道。
29	T	柔道、そうですね。S3さんはどうですか？
30	S3	シンクロ。
31	T	シンクロ、そうですね。S1さんは、他に何かありますか？
32	S1	私は、バドミントン。
33	T	バドミントン、そうですね。確か、インドネシアの選手が金メダルを取りましたよね。
34	S1	はい。
35	T	先生も、柔道はよかったと思います。
36	T	(「柔道」、板書)柔道は、「道」と書きますね。どうして、「道」と書くのでしょうか？他に、何か、「道」とつくことば、何か知っていますか。S2さん。
37	S2	剣道。
38	T	そうですね。(「剣道」、板書)剣道も「道」がつきますね。他に何か、知っていますか？
39	S4	華道。

40	T	「華道」。そうですね。（「華道」、板書）華道も「道」がつかますね。他に何か、道がつくことば、知っていますか？
41	S2	はい。
42	T	S2さん。
43	S2	書道。
44	T	そうですね。（「書道」、板書）他に何か？
45	S3	はい。
46	T	S3さん。
47	S3	ええと、合気道。
48	T	「合気道」。（「合気道」、板書）
49	T	みんな、「道」がつかますね（「道」部分、下線施す）。どうして、「道」と書くのだと思いますか？
50	S	……。
51	T	先生は、こう、思います。（山と頂上の旗、板書） 私たちは、いつも、何か（頂上の旗、指す）目的のために、（頂上の旗、指す）（ジグザグの頂上に続く道を描きながら）道を登ったり下ったりしながら行きますよね。（「道」のつくことば群、指す）柔道や華道も（頂上の旗、○で囲む）うまくなるという目的のために、（頂上に続く道、なぞりながら）練習をしたり落ち込んだり休んだりしながらがんばって進んでいきますよね。だから、「道」と書くんじゃないかなと思います。
52		さて、今日の本文には、（「パチンコ道」のパネル、持つ）「パチンコ道」ということばが出てきます。「パチンコ道」と、聞いたことがありますか？
53	S	……。
54	T	ないですか。
55	T	「パチンコ道」とはどういう意味なのか、読んでみましょう。（「パチンコ道」のパネル、貼る）では、最初のところを、S2さん、読んでもらえますか？
56	S2	はい。（本文、読み）パチンコ道という本が売れているそうです。……」

5 : 55

上記の流れを分析すると、以下の五つの構成からなって 手 → オリンピック → 柔道 → 「道」という道筋が作られており、(2)から(4)へ、「チョー、気持ちいい」 → 北島康介選 ている。以下に、詳細を分析する。

図5

	No.	導入の流れ	具体的活動内容	
(1)	1～3	一般的な導入	自己紹介。出欠確認。	
(2)	1	3～14	その年はやった流行語①	その年はやった流行語、いわせる。
	2	15	” ②	Tの考えいとともに、オリンピックに振る。
(3)	1	21	オリンピック①	明確なオリンピックへの振り。
	2	23～35	” ②	興味を持った競技、いわせる。
(4)	1	36～48	「道」のつくことば列挙	明確に「道」へ振り、「道」のつくことばを列挙させる。
	2	49～51	「道」と書く理由	「道」と書く理由について自分の考え、説明。
	3	52～54	「パチンコ道」	「パチンコ道」を聞いたことがあるかと問うて、本文への直接的な導入。
(5)	55	読解開始		

「道」までの流れの分析

No. 4・8で学習者が即座に的確に答えているのを見ると、(2)の流行語はテレビのタレントや芸能から材を取った、学習者にとって身近で入りやすい話題だったといえよう。そして、No. 15で実習生自ら「チョー、気持ちいい」を出しているが、これはアテネ五輪で2冠となりその年最も日本中の注目を集めた北島選手が優勝インタビューで発したことばで、学習者だれもが知っている流行語であったと考えられる (No. 16)。このことばを端緒として、ことばを発した北島選手 (No. 20) → このことばを発したオリンピック (No. 21) → そのオリンピックで興味を持ったもの (No. 23~35)、と進展する一連の談話は、ちょうどリレーでバトンが受け継がれるように前の話題が接ぎ穂となつて後の話題となり連なっており不自然な飛躍がない。

さらに子細にみると、No. 24・28で学習者のほうから「道」のつく柔道に言及したのにもかかわらず、その時点ではそれを積極的に取り上げようとせず軽く返すにとどめ他の学習者に振りさらに興味を持った競技に話題を広げようとしている (No. 25・27・29)。(4)の「道」への展開を考えればこの二つの発言は実習生にとって絶好のきっかけであったはずであるが、恣意的で急激な転換を避けたものと考えられすぐさま食いつかず、それが結果的にヘリコプター型飛躍の形成を防いでいる。

「道」の説明の分析

そして、学習者全員が興味を持った競技を述べた後で実習生が発話ターンを取る形で柔道に引き戻し、導入の中核(4)に到達する。No. 36では「道」と書く理由を聞こうとするがすぐに止め、他の「道」がつく芸能・スポーツをあげさせている。その理由が本文の本質に通ずることがからでありこのタイミングでそれを問うのは早すぎると判断したものと思われるが、この「○○道」の列挙が、「道」という字の解釈(4)－2を理解させる伏線となり、また No. 25・27・29同様、結果的にヘリコプター型を回避することに成功している。

(4)－2では、まず、あがったことばの「道」に下線を施し注目を集めた上で、あらためて「道」と書く理由を問うている (No. 49)。No. 50の沈黙を受け、No. 51でなされた板書は次の通りである。

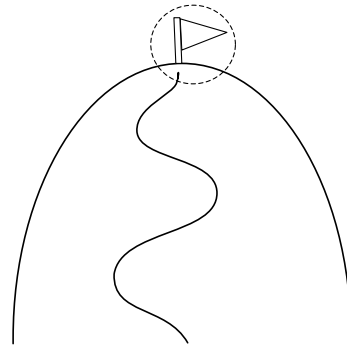


図6

山の頂上に立つ旗は高い精神性を、旗へと続く道は継続的な精進の姿勢を表そうとしたものと思われる。すなわち、芸能・スポーツにおいて高みの精神世界に到達しようと不断の努力をする様子はちょうど山登りをするのと似ている、だから、山登りの道になぞらえて「道」という字が付与されたのではないか、という解釈である。図そのものは凡庸ながらこの実習生が巧みなのは、板書としては山と頂上だけをまず描き、後から道を描きなぞることによって長期にわたる修養を示し、それが精神的な鍛錬を示唆している点である。けれども、続く(4)－3では、こうした精神性と姿勢はパチンコの持つ遊戯性や射幸心などと相いれないのではないかという本文の趣旨には踏み込まず、単に「パチンコ道」ということばを出すだけにとどめている。パチンコのこうした性格を示していない以上、これは当然といえよう。

ただ、その分、No. 55の読解開始がやや性急でごく小さな飛躍が生じているといえる。No. 52で「パチンコ道」を出した後、雑談的に学習者にパチンコの体験を問うてみるなり実習生の経験を話すなりしてその遊び方と性格について話を展開させれば明確に「道」とパチンコとの対比がおのずと浮かびあがり、本文に沿った「パチンコ道」ということばへの疑問の投げかけとなった可能性がある。しかしながら、流行語から「道」に導く無理ない全体構成は飛行機型導入をなしている。

3-5. 飛行機型導入2

本文は、多くのデパート地階の食料品売り場では売れ残ったものは捨てている、その量は多いところで1日3.5トンにも達するが、それにはデパートのブランド・イメージ保持の方針が大きく働いている、という内容である。次の導入は、そうした、一見、理不尽に見えるデパートの廃棄の仕方を理解するのに有効に働いている。

図7

	導入の流れ	具体的活動内容	No.
(1)	一般的な導入	自己紹介。学習者確認。	1
		女子の学習者の髪型に言及。ほめた上で、他の学習者にも同意求める。	17
(2)	デパートへの振り向かせ	バーゲンシーズンのため、学習者にデパートへ行ったかどうか尋ねる。	25
(3)	廃棄方針理解の布石①	スーパーとデパートの違い、考えさせる。(値段、品揃え、品質、高級感、店員)	52
(4)	” ②	デパ地下の盛況ぶりに言及。チラシ見せ、品揃え、紹介。	84
(5)	記事中の語句導入①	「食料品売り場」「デパ地下」板書するとともに、「デパ地下」導入。	99
(6)	” ②	デパ地下にどんな食べ物があるかと問うて、「惣菜」「生菓子」「弁当」導入。	103
(7)	売れ残りの処理方法検討①	売れ残りの処理について質問。捨てる・店員に売る・店員に支給するという方法、引き出す。	125
(8)	読解開始①	「では、今日は、デパ地下について読んでみましょう。」(記事、配布)	148
(9)	売れ残りの処理方法検討②	S1、翌日に店頭で並べる方法に言及。S1の発言を受けて、T、「臭い」から動詞「腐る」を導入、板書。	149
(10)	読解開始②	記事をインターネットから落としたこと説明。T、見出し、読む。	162

導入は13分37秒を要し、上の十の部分で構成されている。(1)の一般的な導入をした後、(2)で時節柄バーゲンをしているデパートに話題を持っていくが、記事の内容と直接関わるのは(5)~(7)である。(5)(6)で「デパ地下」「惣菜」「生菓子」など記事中の語彙を導入し、(7)で売れ残った食料品の処分の方法を問いかけている。

けれども、この実習生が巧みだったのは、そうした内容に踏み込む前に(3)(4)のステップを設け、処理するにあたってはデパートのブランド・イメージが大きく関わっている

ことを学習者に想起させたことである。とりわけ(3)のスーパーとの対比が、デパートの処理方針を理解する布石として機能している。以下、その主要な部分の分析を示す。

廃棄方針理解への布石

次は(3)(4)で、デパートとスーパーと比較させて、デパートにはブランド・イメージがあること、そしてそれを作っているものを明らかにしている。

資料6. 飛行機型 (教材:『できたて勝負』欠品はご法度 パンもケーキも捨てましょう) 2002/4/4 朝日新聞)

48	T	みなさん、普段、買い物をするときには、どこへ行きますか。食べ物とか服とか。
49	S1	スーパーに行きます。
50	T	スーパーに行きます。S4さんはどうですか、毎日、デパートですか。
51	S4	ああ、いえ、スーパーです。
52	T	うん、スーパーですか。やっぱり、スーパーとデパート、ちょっと違いますよね。
53	S	(うなづく)
54	T	ううん。何が違いますか。
55	S1	(笑いながら) 値段が違う。
56	T	そうですね。うん、値段が違います。(数えるように指を折る) あとは?
57	S4	売るもの、売るもの、違います。
58	T	(2本目の指を折る) うん、売るものが違います。それは、どんな意味で違いますか。
59	S3	なんか、デパートの種類の方が多い。
60	T	うん、種類が多いです。あと?
61	S1	品質の問題。いいです。

62	T	(3本目の指を折る) いいですね。品質がいいです。同じ、たとえば同じTシャツでも、デパートのほうが何回洗っても大丈夫。品質、が、いいですね。他にどんなことがありますか。S2さんは、デパートに行くのが好きですか。
63	S2	いえ、好きじゃありません。
64	T	好きじゃありません。じゃ、あまり行きません。
65	S2	はい、あまり行きません。
66	T	うんうん。なるほどね。はい。スーパーよりデパートへ行ったら、ちょっと、気分がよくないですか。(「ふふふっ」といいながら、楽しそうに歩くように体を動かす)
67	S	うん。(うなづく)
68	T	ちょっと自分がお金持ちになった気が、する、かもしれません。
69	S	ううん。(うなづく)
70	T	(両手でつばのようなものを描くしぐさをして) デパートのほうが高そうですね、何でも。高いし、高く見える。「高級感」、が、ありますね。
71	S	(うなづく)
72	T	高く見える、いいものに見える、高級感が、ありますね。あと、S4さん。スーパーの店員とデパートの店員と、どう違いますか。
73	S4	店員?
74	T	お店の人。
75	S4	スーパーのほうが、気が強そう。
76	T	(笑いながら) 気が強い。(しきりにうなづく) そうかもしれない、うん、そうかもしれませんね。何かわからないことがあります、聞いた時、デパートの店員さんのほうが。
77	S3	ていねい。
78	T	ていねいで、やさしくて、親切。
79	S4	教えてくれる。
80	T	教えてくれます。そうですね、はい。今、日本は……。 (S2に向かって) ごめんね、デパートの話で。これからちょっと変わっていくから。
81	S2	いえ、大丈夫。
82	T	大丈夫? 参加してね、はい。じゃ、S2さん。
83	S2	はい。
84	T	今、日本の経済はどうですか。
85	S2	やっぱり、悪い、悪いです。
86	T	うん、やっぱり、悪いです。経済の悪いこと、何といたしますか。
87	S1	「不景気」です。
88	T	不景気です。うん、不況とか不景気、いいますね。今、日本は不景気です。でも、デパートの中でとっても売れているフロア、とっても売れている階が、あります。どこだと思えますか。
89	S	ううん。(答えられない)
90	T	どこかな? (S1・S3指差して) ワンピースも買ったしね。
91	S2	全然、知りません。
92	T	「全然、知りません」。じゃ、デパートにはどんなフロアがありますか。「階」。
93	S1	地下は、地下の階は、一番、売れています。
94	T	地下の階は、一番、売れると思います。(S4を指して) 何があるか、聞いてください。
95	S4	(S1に向かって) 何がありますか。
96	S1	食料品や贈り物を、ううん、売ってます。

97	T	<p>(笑いながら) うん。S1 さん。デパートが好きですね。よく行きますね。そう、はい。</p> <p>ええと、地下には食料品売り場があります。今、日本は不景気で、全然、高い服とか高い靴、高いカバン、(自分のバッグを指して) これは高くないけど、高いカバンなんかあまり売れません。でも、地下の食料品売り場、とっても売れています。</p> <p>ええと(デパートのチラシ見せながら) これは、ちょっと、〇〇(デパート名)ですけど、はい、ちょっとこれは地下の写真とは少し違うんですけども、(食料品、次々指しながら) ま、いろんな、あまり見たことのないくだもの、日本にはないくだものですね、もともと。日本にはないくだものとか、ま、刺身とか、高そうなきれいな、デパートのはスーパーのとはちょっと違うかもしれませんね。(外国産の食料品指しながら) あと、いろんな、これは外国の食べ物ですね。(原産地読んで) ううんと、これは、台湾とかベトナムの食べ物とか書いてあります。スーパーにはあまりないような珍しいものなんか、デパートで売っていますね。</p>
----	---	---

バーゲンセールで何か買ったかという話でデパートに学習者の関心を引いた後、日用品はどこで買うかと問うてスーパーとの対比に移行している。

No. 52でごく自然に違いがあるのを指摘した上で、No. 54から具体的にあげていく。そして学習者から、a. 値段の高い安い (No. 55)、b. 種類の多寡 (No. 57~59)、c. 品質の良さ (No. 61) を引き出している。また、実習生がヒントを与えて、d. 高級感のあるなし (No. 66~72)、e. 店員の対応 (No. 75~79) の違いに気づかせている。さらに、実際のチラシを見せてデパートの品物には f. 希少価値があること (No. 97) を指摘している。すなわち、この6点においてデパートはスーパーと一線を画し、そのことがデパートのブランド・イメージを作りそして保っていることを明らかにしている。したがって、この時点で学習者の中に、売れ残りを処分するにあたってはこの6点が大きく影響を与えるだろうという伏線が敷かれたものと考え

ることができる。

事実、記事ではこれらが売れ残り廃棄方針の基盤にあるとし、ア. 売れ残るとわかっていながら欠品がないよう見せるためすべての商品を閉店まで陳列していること (b・f)、イ. 食中毒を防ぐために賞味期限を短く設定していること (c)、ウ. ブランド・イメージを保つため賞味期限の異なるものを同時に捨てていること (c・d)、エ. ケーキのパティシエが作る側の切なさを訴えていること (e)、オ. 廃棄分は値段に加算されていること (a)、としている。これらを見ると、(3)(4)で廃棄方針の背景をおおむね押さえていることが明らかである。

売れ残りの処理方法検討

(6)の食料品の品ぞろえを受けて、その売れ残りの処分方法を問うた部分(7)である。

資料7. 売れ残りの処分方法

125	T	こういうもの、その日に売れなかったもの、どうしてだと思いますか。
126	S4	捨てる。
127	T	全部、捨てます？
128	S4	回収？
129	T	わからない。皆さんは、どう？
130	S1	店員に……。
131	T	うん。じゃ、S1さんは。
132	S1	店員に、安く売ると思う。
133	T	店員に、安く売ると思います。S2さん、どう思います？
134	S2	(S1を指して) その、その通り。
135	T	「その通り」。S1さんのいう通り。店員に、安く売る。S4さんは、捨てている？
136	S4	なんか、〇〇(コンビニ名)の場合は、捨てるマニュアルですから、たぶん捨てるかもしれません。

137	T	あのう、S4さん。〇〇でアルバイトしてるんですか？
138	S4	違う。新聞で、読みました。
139	T	新聞で読みました。素晴らしい。
140	S4	宿題ですから。
141	T	あ、宿題ですか。(笑い) S3さんはどう思いますか。(板書を指して) これ、全部、売れませんでした。どうなるでしょう。
142	S3	ううん、捨てるか、ええと、社員にあげる。
143	T	社員にあげる。ううん。無料で？
144	S3	そう、無料で。
145	S	(笑い)
146	T	みんな、今、働きたいと思いましたね。
147	S3	違う。無理だよ、それ。
148	T	ええと、じゃ、今日は、デパ地下、(円を描いて、「デパ地下」の板書を指す) について、読んでみましょう。はい。(教材を配ろうとする)
149	S3	あ、それか、ええと、臭くならないものは、次の日は、また、出す。
150	T	あっ、(鼻をつまんで) 臭くなる、臭くなる？
151	S3	ええと。におい？
152	T	(鼻をつまんで) ううん、ええと。みんな、助けてあげて。
153	S4	臭くなる？
154	T	食べられなくなる。
155	S3	そう、そう、そう。
156	T	臭くなって、形もちょっとおかしくなって、(S3を指差して)「腐る」。
157	S3	「クサル」。
158	T	「腐る」、動詞。夏、夏は、すぐ、腐ります。ね。
159	S3	うん。
160	T	「腐る」。
161	S3	あ、「腐らない」？
162	T	そう、「腐らない」、ね。(「腐る」板書。ふりがなづけ)。ひらがなでいいですよ。「腐る」、ね。

No. 125の実習生の問いに対して学習者から得られたのは、a. 捨てる (No. 126)、b. 店員に安く売る (No. 132)、c. 社員に与える (No. 142)、d. 翌日また売る (No. 149) の四つである。d. は、No. 148で実習生が導入を切り上げ読解に入ろうとしているのにもかかわらずS3がまだ処分方法に固執して出てきたもので、実習生はそこから「腐る」を引き出している。

これらの答えがことさらデパートのブランド・イメージを踏まえたものとするのは強引で、思いつくままに処分方法を列挙しただけといえよう。それはむしろ実習生のリードに沿った形で、実習生は一つ一つの答えを深追いせず読解への移行を意図している。けれども、実はこれらの答えはいずれも記事中にあり、ア. 閉店が近付くと社員に値引き販売する店があること (b)、イ. 売れ残りを従業員が

食べたり持ち帰ったりすると「退店」を命じられる店があること (c)、ウ. 冷蔵庫で一晩保存して翌日も店頭で並べる店もあること (d) が、述べられている。もちろん a. は、記事冒頭で詳細に述べられる中心話題である。こうしてみると、(7)(9)においても、記事で取り上げられる処分方法について導入段階で押さえていることが明らかである。読解後の話し合いでは、一次産品を作るのに大量のエネルギーが使われていること・廃棄に際しても同様にエネルギーと人が必要なことなどの意見に混じって、自分たちの食に対する意識を変えるべきであるとの意見が出された。単にデパートのあり方に対する感情的反発ではなく、実はそれと消費者が望んでいるものとは裏腹の関係にあることに思い至っている鋭い意見であるが、実習生が導入した(3)のデパートのブランド・イメージ及びそれを生み保つための処分方

法(7)(9)が想起させたものの延長線上にあると考えられる点において、記事のテーマの理解が十分なされていることが推察される。そうした意味において、資料6・7は十分な飛行機型導入をなしている。

4. 結 び

導入に飛行機型・ヘリコプター型・ロケット型の三つのタイプがみられ、中でもヘリコプター型を取る傾向が強いことを知ることは、課題認識型授業を見据えた今後の実習指導のあり方の一端を示唆するものと思われる。

冒頭に指摘した通り、ヘリコプター型が飛行機型に比して問題となるのは談話の組み立ての稚拙さであった。すなわち、背景・経緯・因果関係などの問題構造を十分検討しないうちにすなわち学習者の中にスキーマ形成がなされないままに題材理解へと移行してしまう。その点、飛行機型では問題構造が十分に把握されており、それを順を追って明らかにしていく点においてスキーマ形成に寄与する。こうした点を考えると、導入において求められる最も重要なことは題材の問題構造の意識化とその「授業化」であるといえよう。

すなわち、指導に臨むにあたってなすべきは、まず題材の問題構造の把握そのものである。次に、実際の導入進行を念頭に置いた問題構造の図式化である。この作業には既存スキーマ活性化のための日常的なエピソードや学習者の母国事情聞き出しの他、学習者の理解に沿った新スキーマ形成のための構造要素の取捨選択や軽重付けなどを盛り込む作業も含まれよう。さらに、学習者の新しい課題認識を形成するための、自己表現をさせる内容とその形の見極めも必要になろう。通常、日本語教育における教案という作業内容を時系列的に並べたものを指すが、こうした図式は課題認識型授業における第二の教案ともいえるもので、導入のみならず題材の理解さらに発展的な活動に移行してもその指針として活用すべきであるし、またメタ評価の材料としてこれらの活動中およびその後のフィードバックにおいて有効であると考えられる。

なお、本論は2009年度同志社女子大学在外研究助成を受けて執筆したものである。

参考文献

岡崎眸・岡崎敏雄 2001『日本語教育における学習の分析とデザイン』凡人社

佐々木倫子 2002「日本語教育で重視される文化概念」細川英雄編『ことばと文化を結ぶ日本語教育』凡人社
細川英雄 2002『日本語教育は何を目指すか』明石書店
丸山敬介 1995『日本語教育演習シリーズ5 教え方の基本』京都日本語教育センター
丸山敬介 2002「学部学生の日本語授業観察の観点」『学術研究年報』第53巻 同志社女子大学 総合文化研究所

注

- 1 佐々木 2002 pp. 219-230
- 2 2003『テーマ別 中級から学ぶ日本語 改訂版』（研究社 本文では『中級から学ぶ日本語』）、2006『テーマ別 上級で学ぶ日本語 改訂版』（研究社）、2003『ニューアプローチ 中級日本語 基礎編 改訂版』（日本語研究社）、2005『ニューアプローチ 中上級日本語 完成編』（日本語研究社）、2001『国境を越えて』（新曜社）、以上5冊の教科書の教師用引き相当分における授業進行の項の分析結果
- 3 本論においては、「プロセス」「構造」「構成」の3語について厳密な使い分けを行っていない。強いていえば、日本語授業を形作る作業要素を区分したものが「構造」「構成」、それをさらに時系列的要素を加味してみたのが「プロセス」であるが、明確には区別していない。
- 4 当然ながら、実習生・学習者の背景、養成プログラム内容などは一様ではない。実習生は、大学生の場合、学部3年生以上で日本語教育専攻の者、大学院生も同じく日本語教育専攻の者、民間機関の場合、学部学生・主婦・会社員・民間企業の退職者・アルバイトなどさまざまな年齢なども含め多様な社会的背景を持っていた。しかしながら、①成人を対象にしたクラス形態授業で実習を行ったこと、②中級段階では『テーマ別中級から学ぶ日本語』（研究社）を教科書とし、上級段階では新聞及び雑誌の記事などを実習生自ら選んで教材としたこと、③導入から最後の発展的な活動まで通して一人で受け持つことを旨としたことの各点において共通し、同一の観点から分析してもよいとした。その他、④実習生は実際の日本語教育の経験をほとんど持たず、持っていたとしてもごく短期間、個人的に指導した程度かそれに相当するものであったこと、⑤実習を行うまでに日本語の構造的知識・日本語教育の

歴史と社会的背景・教授法（実習に求められる具体的な技術・知識なども含む）などの基本的知識は学習済みであったこと、⑥学習者は5名前後で、民間機関在學生・留學生や主婦などの外国人に参加してもらったケースと他の日本人受講生が模擬学習者となったケースがほぼ半々であったこと、⑦中級段階のごく初期ではその日の学習項目は何でありよってこれこれの語句・表現は知らない・わからないものとして実習に臨むよう指導教師から学習者に事前に協力を求めたが、上級段階ではそのような打ち合わせは行わなかったことの、4点においても共通していた。

- 5 「その他」の分析はまだ十分に進んでいないが、学習者の立場からするとほとんど関連のない話題がいくつか出されて教材・教材内容に行きつく「ジグザグ型」などがあった。
- 6 岡崎・岡崎 2001 pp. 44-47
- 7 図中、「T/S」とあるのは発話者で、T：実習生・S：学習者である。「S1、S2、S3、…」とあるのは異なる個々の学習者を示す。「No.」とあるのは発話番号で、原則として1発話＝1ターンとしたが内容的に細分化した部分もある。また、個人を特定してしまうおそれのある部分は改めた。図右上下にある数字は、実習開始時からの経過時間を示す。なお、エスノメソドロジー関連の領域では音声や動作の文字化の規則が確立されているが、本論では実習生の活動の把握のしやすさに重点を置きなるべく平明な形で書き表した。
- 8 導入部分のうち、(6)～(8)の文字資料は割愛した。